学都松本・教育100年を語る会　連携講座資料

教育の未来を語る

「学都松本・すべての子どもに教育を」

～ 不易なる旧開智学校の理念が脈々と ～

令和元年9月22日　　学都フォーラムにて

松本市教育長　　赤羽　郁夫

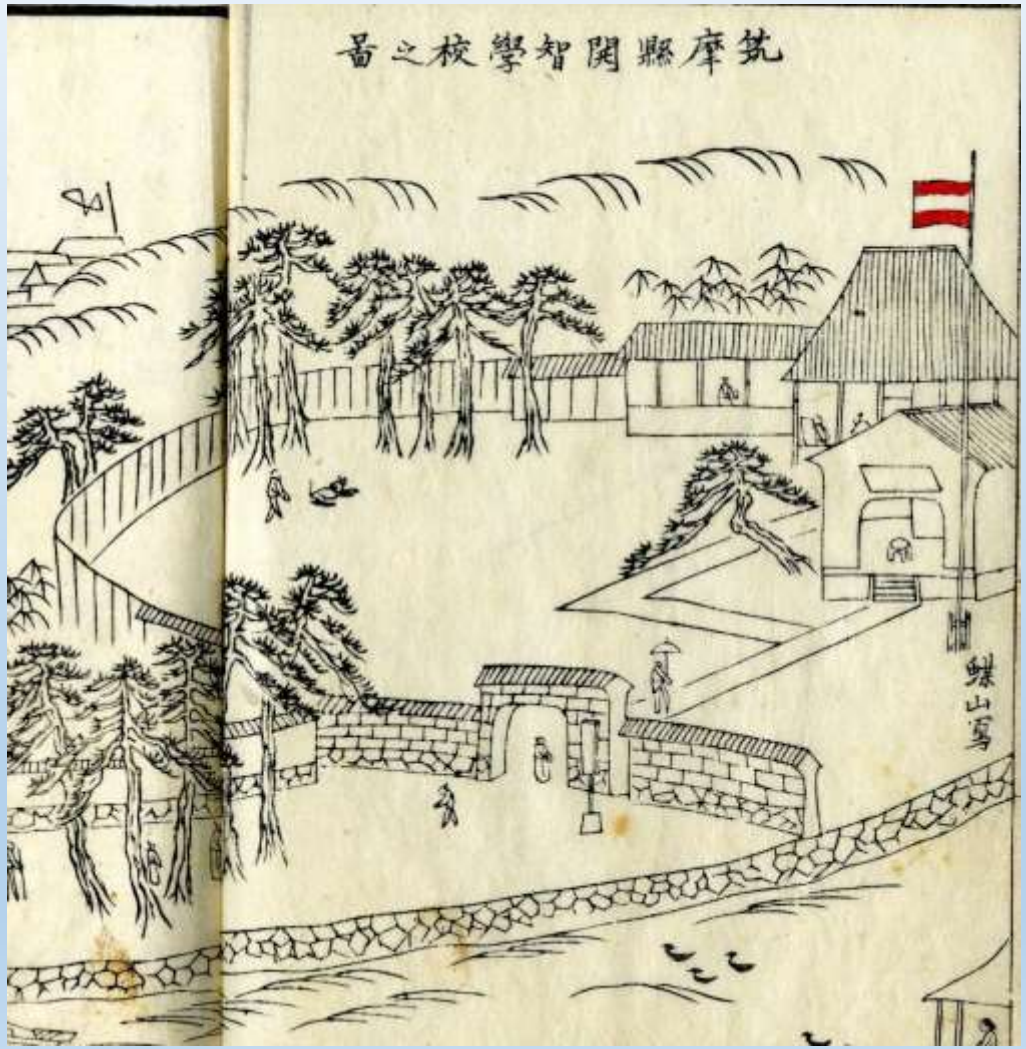
内外教育　2017年（平成29年）6月30日

「教育長は こう考える」でのインタビュー記事より

「すべての子どもに教育を」

「長野県松本市は『学都松本』と呼ばれ、教育を重視する気風で知られる。国宝松本城が有名だが、明治の文明開化を象徴する旧開智学校を思い浮かべる読者も多いかもしれない。市内には全国で唯一、刑務所の中の公立中学校もある。受け継がれる理念をきいた。」

①　開智学校の誕生



明治６年５月６日

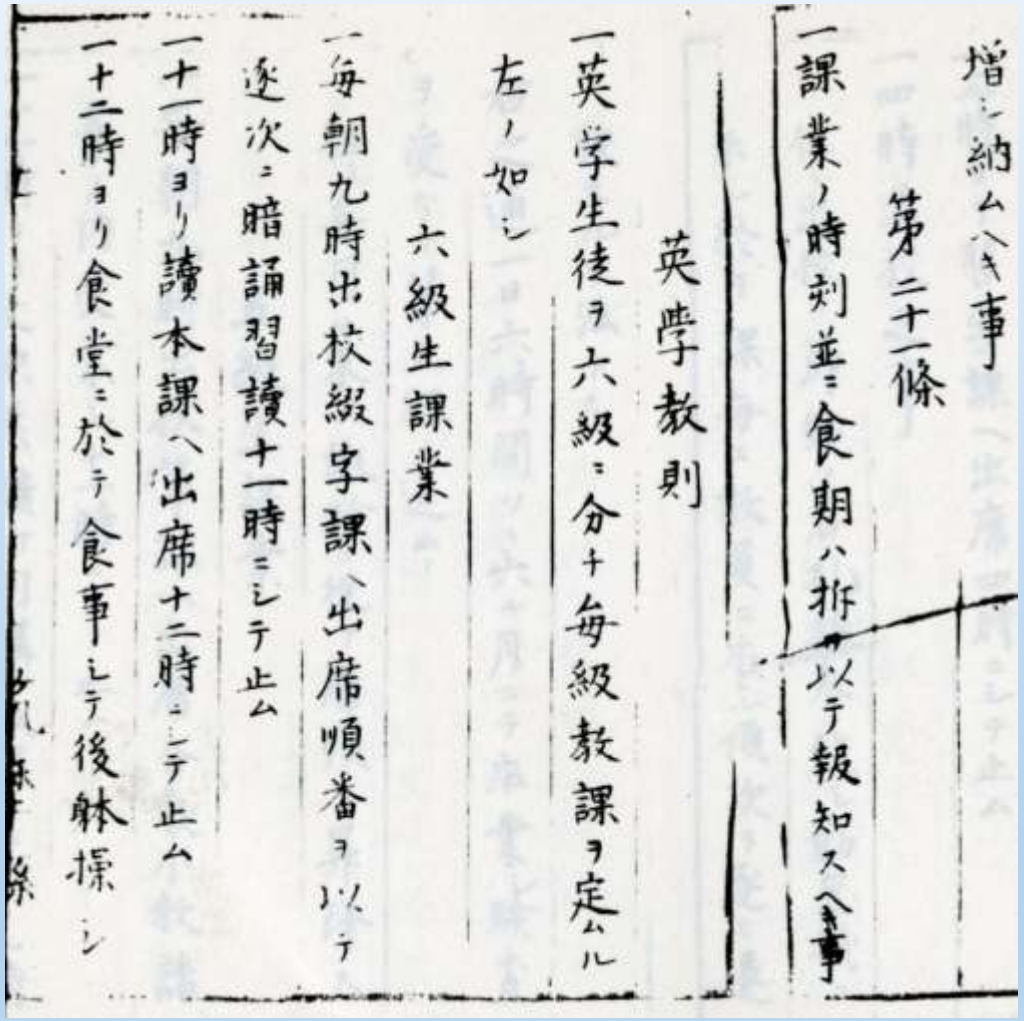
第二大学区筑摩県下

第十七番中学区

第一番小学開智学校として開校

女鳥羽川沿いの旧全久院の建物を利用

②　県下最大の小学校


増ニ納ムヘキ事

第二十一條

一課業ノ時刻並ニ食期ハ折ニ觸テ報知スヘキ事

英學教則

一英学生徒ヲ六級ニ分チ毎級教課ヲ定ムル左ノ如シ

六級生課業

一毎朝九時出校級字課ヘ出席順番ヲ以テ逐次ニ暗誦習讀十一時ニシテ止ム

一十一時ヨリ讀本課ヘ出席十二時ニシテ止ム

一十二時ヨリ食堂ニ於テ食事シテ後躰操ヲ

「学問は身を立てる財本」と謳う学制による小学校

読本課・算術課

習字課・英学課

教員数約50名

生徒数1,051人

③　教育権令　永山盛輝

薩摩出身、筑摩県権令（県知事）として、教育を県政の柱に据え学校設立を強力に推し進める。自ら県内中を回り、各地で学校設立の説諭を行った

筑摩県の就学率は全国1位

※明治8年（1875）の統計

筑摩県　７１．５％

全国平均　35.62％

④　開智学校の教育

・開校当初の授業

9時～11時	読本
11時～12時	算術
12時～13時	喫飯・体操
13時～14時	算術
14時～16時	習字

師範学校から教授書が刊行
教員自ら教科書作り

⑤　開校当時の教え方

【教えること…イ（糸・井・犬・豕）の読み方】

①席順で1番～12番まで一人ずつ“糸”を読ませる
②24人全員に“糸”を読ませる
③席順で13番～24番まで一人ずつ“井”を読ませる
④24人全員に“井”を読ませる
⑤“犬・豕”も①～④と同様に教授する
⑥一人に“糸井”を読ませ、次に“犬豕”を読ませることを
　何回か繰り返す

※筑摩県師範学校編『上下小学教授法細記』より抜粋

読方（国語）の教え方
明治７年（1874）頃

⑥　開智学校の特別支援教育

・成績不良児学級・落第生学級　明治２３～２７年

→児童の学力に合わせたクラス編成

⑦　先生の言葉１

- 「一般の児童より能力の劣った児童の将来こそ其の運命のほどが察せらるる」
- 「十分なる研究をとげてかの憐なる児童の救済に努めたい」

- 27年に成績不良児学級を廃止した後も、成績の低い児童を前に座らせ教員が手厚くケアできるように努めた
- 明治41年に「第一学級」として成績不良児学級が復活

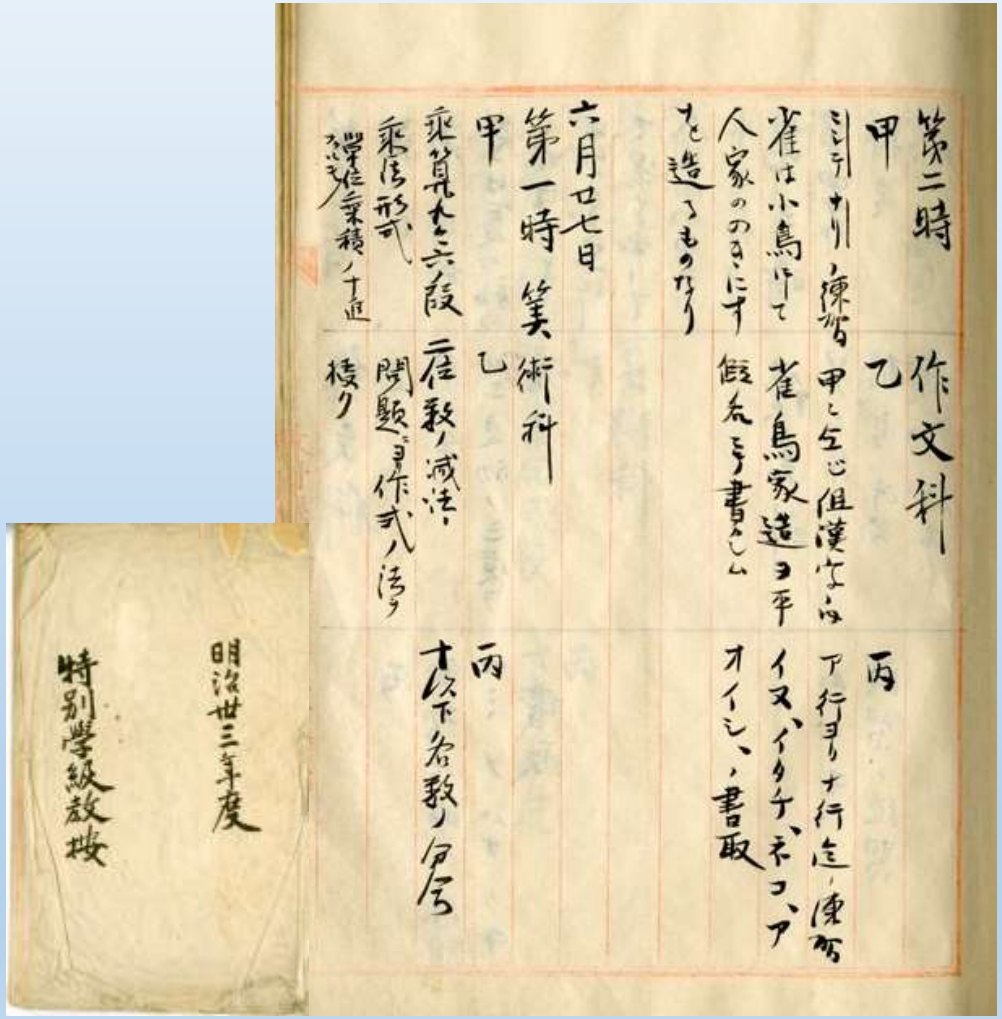
→「一般児童には決して此学級の特殊なることを知らしめず」

⑧　開智学校の特別支援教育

・特別学級

→丁稚奉公や芸妓修行の子のための特別学級

⑨　特別学級の特徴



明治32年度　特別学級教案明治（1899）

- 能力別の教案

クラス	教授内容
甲	ニシテ　ナリ　の練習 雀は小鳥にして人家ののきにすを造るものなり
乙	甲と同じ、但漢字の内、雀・鳥・家・造を平仮名にて書かしむ
丙	ア行よりナ行迄の練習イヌ、イタチ、ネコ、アオイシの書取

⑩　子守り教育

・子守教育

→子守奉公の子に、放課後、無償で授業を行った

⑪　先生の言葉２

- 「もっとも同情を**以て**親切に之を導き世に子供の大切なること愛すべきことを知らしめる」
- 「生涯無教育に終わらしむるは実に惨酷」

子守教育所卒業式答辞　明治45年

- 私共は、人なみに学校へ出ることができず、父母の側を離れて奉公する不幸せの者ですが、幸い子守学校へ入れていただいて、読み書き勘定のことより女子の道、子供の取扱いまでも教えていただきまして懐かしい父母兄弟に便りもできるようになりましたのは、全くご主人と先生のおかげでございます。

⑫　林間保育

・林間保育

→体の弱い児童を一日森で遊ばせ、健康回復を図った

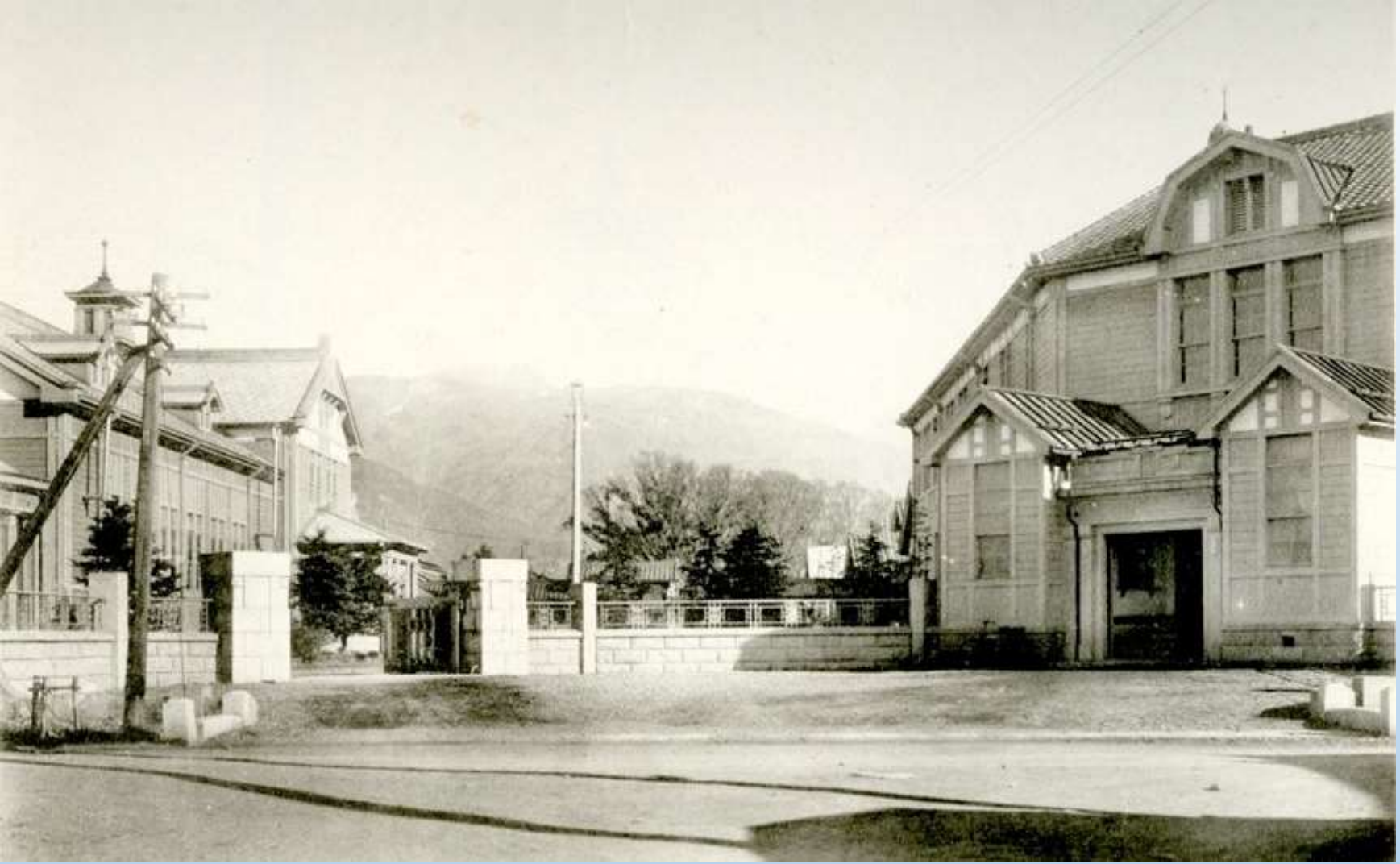
高等教育への高まり

松本高等学校設立の経緯	
明治30年	第７高等学校誘致を文部省に請願
40年	松本市市制施行
43年	第9高等学校長野県誘致内定 内閣更迭で沙汰止み
大正６年	三度誘致を文部省に請願、内定する
７年	松本市に高等学校設置決定
８年４月	松本高等学校設立
９月11日	松本中学校を仮校舎として開校
９年８月	本館落成
11年９月	全校舎落成

松本高等学校―あがたの森

- 明治32年から約20年にわたる誘致活動
- 小里市長を中心に、辻新次や澤柳政太郎など、多数の協力者
- 最後は新潟県との激しい誘致合戦のすえ、大正8年に松本高等学校開校
- 松本市は開校のため、市の予算の1.5倍にもなる20万円を寄附
- 帝国大学進学のための高等教育
- 全国から秀才が集まり、講演会・駅伝・演奏会など松本の文化的向上に貢献

記念祭のゲート　玄関の飾り付けのゲートが、市民の笑いを誘う。ゲートを序曲に、諷刺の利いた部屋の飾り付けが待っている。



校門がなく、道路から直接校舎に入る設計
“大衆から離れての高等教育はありえない”という
当時の文部大臣のアイディア

地域に開かれた精神は現代へ

あがたの森文化会館

地域住民による文化財建造物の利用日本一！？

公民館施設として年間約10万人の利用者

松本高等学校誘致は　松本に何をもたらしたのか

〇文化的側面

・知へのあこがれ　　本屋・映画館の増加
（教養主義の伝播）

・異文化交流　　下宿・間借り・思誠寮

〇経済的側面

〇政治的側面

学生を大切にする気風

大正期の自由主義的潮流の高まり

〇再び開発主義教育・・・児童中心の教育へ

大正３年	綴り方研究会
６年	長野師範学校附属小学校の研究学級創設
７～８年	山本鼎「児童自由画」運動
７～10年	白樺運動の実践最盛期

「…子供の偉大な芽生を我等は惜しげもなく、つむようなことをやってはいないだろうか。これを恐れるのである。子供の天賦の能力を十分伸ばしてやりたい。そこに我々の全的努力は傾注されなければならない。

（大正10年　理科細目編纂趣意より）

一方で

大正７～８年　　戸倉小学校事件
　　倭事件
　　中箕輪事件

13年　　上飯田事件

９月　　川井訓導事件

（松本女子師範附属小学校にて、文部省視学委員の視察授業において）

文部省・・・国定教科書の使用を強要
　　自由主義教育への厳しい干渉と弾圧

西尾実・・・雑誌「信濃教育」で県の姿勢を厳しく非難

「道は高くけわしきもの　登るに安からず　理想の実現は寧ろ今後にあり」

社会の理想と矛盾の拡大

川井訓導事件

- 明治後期から、国によって定められた画一的な教え方ではなく、子どもの自由や個性を尊重した教育の研究が盛んに→大正自由教育
- 自由教育への国の取締りは厳しく、松本でも川井訓導事件（大正13年）が発生
- 松本女子師範学校附属小学校の川井清一郎訓導の修身の授業が、国定の教科書を使用せず、国法に反したものと糾弾　→川井訓導休職
- 『信濃教育』誌上など、県内教育者が徹底的に抵抗するも、県内の自由教育的な動きはことごとく弾圧が加えられ下火に・・

信州教員の反骨精神

大正14年5月号は「川井訓導の修身教授問題」特集号。

様々な人物の問題に関する論文を掲載

「教える」　から　児童自身が「学ぶ」　（昭和へ）

〇場所も一つの教材として考え得る・・・校外教授・郷土教育

〇文集　昭和９年１月　　四年二学級
源池部　四之二　　山田富子

- 「さんぱつ」　降旗　満壽夫
- 「たのしい浅間温泉」　石川　明
- 「校庭運動会」　中村　静子

松本少年刑務所　　桐分校創設までの経緯

明治１９年	松本町六九町に置かれていた西堀の獄を松本監獄と改称
３６年	長野監獄松本分監と改称
大正１１年	長野刑務所松本支所と改称
１５年	現在地に移転
昭和１７年	岡崎少年刑務所が長野刑務所松本支所に移転 松本少年刑務所と改称
３０年	松本市立旭町中学校桐分校開設

昭和28年当時　　受刑者の８割が新制度の義務教育未修了者

当時の所長以下、関係職員は、こうした状況を憂い、種々の調査研究に着手。

その結果、
「所内に中学校を設立し、中学校課程の正科を授ける以外に方法はない」
との結論に至る。

長野県教育委員会、松本市教育委員会、旭町中学校は積極的に理解を示す。

昭和３０年２月　　法務省は監獄法施行規則を改正

３月　　松本市議会　旭町中学校桐分校開設を議決

４月　　開校（入学式　４月６日）

松本少年刑務所　「少年母の会」の設立

昭和29年７月１日　設立

「松本少年刑務所青少年受刑者の更生自立を促進するため青少年受刑者親代わりとなり、物心両面より激励援助することを目的とする」

会員　約750名

総会・講演会

運動会への景品援助　　クリスマスカード寄贈

青春メッセージ発表会商品援助　　卒業記念品授与

その他、靴下など日用品の援助等

松本子ども日本語教育センター創設

平成19年	日本語を母語としない子どもの増加
	中信多文化共生ネットワークより支援強化の要請
20年	日本語を母語としない子どもたちへの県からの支援の終了になる見通しが判明 日本語支援体制の検討を開始 市長より「大切なことは県の支援がなくなっても続けるように」との方針が示される
21年10月	田川小学校内の余裕教室を活用し、「松本子ども日本語支援センター」として開設 支援の主体は、中信多文化共生ネットワークに委託
３０年	開設10周年記念の会を実施

時代の変化とともに教育の在り方が大きく変わってきた

変わらないもの

集団主義　　教え主義

教育は教化なのか

みんなで考え合いたい